

西洋中世学会 第13回大会シンポジウム

異端の眼、異端を見る眼

2021年6月20日（日）

趣旨説明

コーディネーター：草生久嗣 Hisatsugu KUSABU（大阪市立大学）

西洋中世における異端問題は、国際学界の動向に沿って本邦の中世学でも早くから注目を集めてきた。現在もなお「共生社会における他者」を扱う問題系の一つとして、対立や分断を抱える現代社会に求められている研究課題であると言える。

古代末期の教義論争や、近世の宗派イデオロギー対立の枠組みを超え、中世における異端にまつわる問題は、民衆宗教運動や〈正統—異端〉構造、そして「迫害社会」の成立などのキー概念を生んで、中世社会を活写してきた。「運動の旗手としての異端」、「異議申し立てとしての異端」、「正統なくして異端なし」あるいは「正統もかつては異端の一つ」などのフレーズは、アカデミズムの内外に定着している感がある。

20世紀の中世異端研究は、中世カトリック社会における〈正統—異端〉構造の特性を明らかにすることに貢献している。〈正統—異端〉構造の語は、伝統文化—サブカルチャー、体制—批判者、中心—周縁、多数—少数、客観—主観などの傾斜のある二項対立一般への、インパクトのある言い換えとして一般化した。その後、方法的諸転回を経験した研究動向は、審問制度や文書行政史にシフトし、かつての〈正統—異端〉構造にまつわる問題系は、民衆心性や政治制度の表象史の後景にまわった感がある。

しかしながら、西洋中世社会において、「異端とされた側」から社会を見る眼（異端の眼）と、他者を異端という概念枠でとらえようとする眼（異端を見る眼）の関係性は、多文化共生社会への適応にまつわって、西洋中世学がその豊かな蓄積とともに比較考察の材料を提供できるテーマである様に思われる。

本シンポジウムは、西洋中世史学が培ってきたキリスト教異端にまつわる問題系の歴史を踏まえ、異端とされた側（異端）と、異端断罪した側（正統）を「正統と異端」のダイコトミーにのみ収斂させるのではなく、異端問題を生じさせる知の制度を支える道具だてに着目して分析してみたい。パネルでは、神学における構築概念、信仰の依り代としての藝術作品、ビザンツ及びイスラム知識人の分派学・異端学、正統体制の権威から離れて成立した「聖典」などの諸道具をとりあげ、それらを異端問題に取り込んでいった「異端の眼・異端を見る眼」について紹介してゆく。

1. 坂田奈々絵 Nanae SAKATA (清泉女子大学) (カトリック神学)

正統性の定義／異端へのまなざし
—レランズのウィンケンティウスを例として—

本発表ではレランズのウィンケンティウス (450 年頃没) が説いた正統観と、そこに現れる異端への理解について、彼に先行する教父達の異端についての理解との関連や、その受容の問題を視野にいれつつ分析を行う。

ウィンケンティウスは 434 年に書かれたとされる著作『忘備録』 *Commonitorium* において、「quod ubique, quod semper, quod ab omnibus (どこでも、たえず、そして皆によって)」信じられてきたことが正統であり、教義の発展は「in eodem scilicet dogmate, eodem sensu, eademque sententia (同一の教理、同一の意味、同一の見解において)」あるべきだという原則を提示した。それは教義論争を経て明確化した正統派の自己定義、いわゆる公同教会 (Ecclesia Catholica) の概念を明文化したものであるとされてきた。ここで特に注目したいのは、このような原則が対異端の文脈から出てきたということである。彼はこの書物の冒頭で、「公同信仰の真理と異端の邪な誤謬を、どのようにして、どのような確実な、いわば一般的かつ規則的な方法によって見分けることができるのか」という問いを立て、オリゲネスやテルトゥリアヌス、また教義形成の過程で異端とされた様々な人物に言及し、それらの言説に対する形で如上の原則を述べる。その上で、異端とは個別的なものであり、あくまで少数で、そして新しいものであるとする。特に彼はテモテへの手紙一 6 章 20 節に登場する「声の冒涇的な新しさを避けよ」という言葉を背景として、異端の「新しさ」をたびたび強調している。

公同性の定義や正統性についての主張を分析することは、ある集団ないし個人がどのような理路において「異端」として扱われうるのかを考究することであり、そもそも異端とはなにかと問うことにつながるだろう。ウィンケンティウスの記述を通して、正統という意識のうちに浮かび上がる「異端を見る眼」について考えていきたい。

2. 草生久嗣 Hisatsugu KUSABU (大阪市立大学) (ビザンツ異端学)

ビザンツ帝国の異端学
—異端誌としてのパノプリア文典—

ビザンツの「正統」すなわちカルケドン派 (皇帝派) 教会は、オイクメネー (合同生活圏) 上において、好むと好まざるとにかかわらず、異説をもって帝国を糾弾する人々の集まりと共生しなくてはならなかった。第七全地公会議を経て、正統信仰の勝利を宣言したあとの中期ビザンツ帝国教会は、同時に領域内外にその基準からはずれ、反抗もする法統、教会、徒党を多種多様に抱えることを自覚することとなった。それらは時々の政権の事情や信仰体制のありかたによって告発され、異端名辞をあてがわれて「正統」教会から隔絶されるべき存在としてあった。

ビザンツに異端審問制度はなくとも皇帝主導でアウト・デ・フェを行うことが可能であり、また教区・管区における問題分子を探り出すという思想調査のシステムは稼働していて、その意味で帝国教会は異端に寛容であったわけではない。ただし「異端学」と総称できる知的活動が存在し、異端認定は「異端か否か」、もしくは「正統教会に従うか否か」の判断だけではなく、必ずビザンツ知識人による観察による個性把握と、罪の構成要件の確認が求められた。そしてその多様な異端名辞ごとに存在を仕分けて個別論破してゆくための「パノプリア（完全防護の意）」文典が作成されている。

ビザンツの異端学の特徴は、そうした他者との折衝に備えた異端誌文典の作成にある。「異端（ハイレスス）」を様々な個性ある人的集団「分派（ハイレスス）」とみるビザンツ異端学的視点に立ち返ることで、その集団が織り成す合同生活圏としての東地中海世界研究を再考することが可能になるように思われる。そしてそうした「異端学」的活動が東地中海における宗教・信仰上の特長の一つであったことを示唆し、イスラーム学ほかが取り組む東地中海圏の「党派研究」の展開にも寄与するように思われる。

3. 菊地達也 Tatsuya KIKUCHI（東京大学）（イスラーム宗派学）

イスラーム教分派学と異端／異教

本発表ではイスラーム教におけるビドア（逸脱）、タクフィール（不信仰者宣告）、棄教（リッダ）といった概念について概観した後、イスラーム神学の一領域である分派学がどのような背景のもとでどのような目的を持って出現したのかを考える。分派学は、73分派出現に関する預言者伝承によって強く規定され、護教的な性格を帯びることになったが、神学的観点からイスラーム圏の諸派諸教をカタログ化する知的営為でもあった。本発表では、分派学の大成者であるシャフラスターニー（1153年没）の著作『諸宗派と諸宗教の書』を主に取り上げ、分派学書において逸脱や棄教がどのように記述されたのか、時代や状況に応じた情報更新がどの程度あったのか、スンナ派以外の宗派はスンナ派的な分派記述に対抗する言説を編み出しえたのか、といった問題について考察する。シャフラスターニーは、客観的記述を心がけ、特定宗派に対する不信仰者宣告に対して慎重な姿勢をとりつつ、預言者スンナ（慣行）からの逸脱について具体的な基準を設定している点で分派学の大成者と評価できよう。しかし、分派学書が抱えている地域的、時代的な偏りは結局は克服することはできず、この偏りゆえに、分派学書は、アラウィー派、ドゥルーズ派といった現代の宗教的少数派の記述に関してはあまり貢献できていない。

4. 細田あや子 Ayako HOSODA（新潟大学）（宗教図像学）

異端的図像学の可能性

中近世ヨーロッパにおいて制作された聖母子像のなかに、聖母マリアの腹部が左右に分かれ、体内が開くようになっている彫刻がある。この彫刻をさす名称は英語では決まったものがないが、ドイツ語で

Schreinmadonna, フランス語で Vierge ouvrante, スペイン語で Virgen abridera, Virgen tríptico などといわれている。現在約 80 点ほど、13～17 世紀の作品が残っているが、おもにドイツ、フランス、スペインの工房で制作されたものである。木製、象牙製などで、高さが 25cm～150cm と大きさがさまざま、個人的な使用と、修道院や教会に設置されて公に用いられた場合が推測される。聖母の内側には、大きく分けるとイエスやマリアに関する物語場面と、三位一体の図（「恩寵の座」）の 2 種が表象されているが、三位一体の像が造形化されている作例が多い。

このような聖母子像のうち、マリアの体内のなかに三位一体の図像がある表現は、ジャン・ジェルソン（1363-1429）、ヨハネス・モラヌス（1533-1585）によって異端的であると批判され、最終的には 1745 年、教皇ベネディクトゥス 14 世により禁止された。ジェルソンとモラヌスの批判の要点は、三位一体のすべてが聖母のなかで受肉しているかのように表現することは錯誤であるということである。確かに、マリアが三位一体を宿しているように見える表現は、正統信仰の側にとっては挑発的であったろう。

本発表では、聖母マリアが三位一体を内部に秘めているという表現が、文字ではなく造形物という媒体で表象されていることに着目したい。この立体的な作品の特徴としては、礼拝する側、用いる側が実際に手で触れて聖母子像の胸や腹部を開閉するという（神秘的な／暴力的な）行為により、体内に存在するものをあらわにしたり、秘めたりするという動作があげられる。このような可動式造形物には、視覚のほか触覚に訴えかける作用が大きい。処女である聖母の不可侵的な部分をあらわにするという行為については、ジェンダー、マテリアリティ、パフォーマティヴィティといった観点からの議論が可能である。三位一体の教義と聖母マリアとの関係の図像についても多様に論じられるべきであろう。マリアは比喩的にさまざまに描写されるが、文字とは異なる媒体によるマリア信仰の表象のなかに、非正統的、いわば異端的要素が見出される作品例を検討したい。

5. 有田豊 Yutaka ARITA（立命館大学）（ヴァルド派文献学）

「異端」の眼から見た「正統」の姿 —中世ヴァルド派詩編におけるカトリック教会のイメージ—

12 世紀に創設され、カトリック教会から「異端」とされた中世ヴァルド派に関する研究は、13 世紀から現在に至るまで、長きにわたる蓄積がある。各研究者が「ヴァルド派」という集団の実態を捉えようとする中、先行研究においては、専らカトリック教会側の文書に依拠する形でヴァルド派像が浮き彫りにされてきたという経緯がある。しかし、カトリック教会文書には教会当局の「異端を見る眼」という敵意や危機感に根差したバイアスが内包されるため、当該史料を通して浮かび上がるヴァルド派像は、常にカトリック教会側の視点に立脚するものであった。こうした状況下において、より客観的な形でヴァルド派の実態を明らかにするためには、カトリック教会のみならずヴァルド派側の視点も同時に取り入れ、2 つの異なる立場に基づいた分析が必要だといえる。

ヴァルド派側の視点を取り入れるには、「ヴァルド派文書」と呼ばれる文書群の解読と分析が欠かせない。中でも、15 世紀から 16 世紀にかけて作成された詩編の中の 1 つ『崇高なる読誦』*La Nobla Leyczon* は、中世ヴァルド派の教理書的作品ともいえることから、様々な研究者の注目を集めてきた。『崇高なる

『読誦』には、「キリスト者」*crestian*と「偽キリスト者」*fals crestian*という2種類の対極的なキリスト者が登場しており、前者はヴァルド派を、後者はカトリック教会を指すものとして論が展開されていく。これらの二項対立は、ヴァルド派内部で発展した「正統と異端」の概念を示唆するものと考えられ、『崇高なる読誦』に加え、詩編に含まれる他の作品にも類似の傾向が確認できる。これら2種類のキリスト者が持つ特徴を明らかにできれば、中世ヴァルド派の精神世界を理解するための新たな視座が得られるだけでなく、「異端」とされた人々の眼から見たカトリック教会の姿を窺い知ることも可能となるだろう。

よって、本報告では『崇高なる読誦』をはじめとする中世ヴァルド派詩編を分析し、「キリスト者」と「偽キリスト者」の特徴から、当時のヴァルド派内部における「正統と異端」の概念の理解を試みる。そして、「正統」と位置づけられるカトリック教会が、「異端」とされた人々の立場から、どのような集団として評価されていたのかを明らかにする。